

つるかの四季



レーザーを使い水中で鋼板を切断する試験装置（レーザー共同研究所）

敦賀市の画家、柴田邦彦さんは退職後に首都圏から移住。嶺南の文化や祭りを訪ね歩いて、水彩画に描き続けています。「こんなにいいところはない」と話す大阪生まれの柴田さんにお話をうかがいました。

画家 柴田邦彦さん



お生まれは大阪とか？

就職も大阪のメーカーでした。本当は撮影所の美術部門へ行きたかったんですけどね。会社では宣伝部でデザイナーをしてましたが、管理職になると、どうしても実務から離れる。そんなこともあって、社内には絵画部を作りました。外部の先生を招いて、僕も一緒に描く。部下を育てることもありました。

東京転勤中に64歳でリタイア。そのころ千葉にマンションを買って、それを機に絵も辞めたんですが、それが失敗でした。旅行をしても遊んでもあかん。イライラするとか、精神的に荒れてくるんですね。後で分かったんですが、それは絵を描くのを辞めたからやと。

敦賀に移り住んだわけは？

あるとき、都内の美術館に出かけたら、敦賀在住の絵の仲間に出会った。そこで「絵を描きたいけど、大きな古い農家が空いてないやろか」と聞いたたら、「ある。見においで」ということになって、見に行ったのが今住んでる杵見の家。ほどなく移ってきました。それが9年ほど前。どこが気に入ったのですか。

近くに人家がなくて、周囲が自然そのもの。遙か野坂山までずっと目に突き当たるものがない。朝起きて深呼吸して空気がうまいという生活は今までなかった。それが気に入りました。ストレスに満ちた都会の人間が快感を覚えたんやね。そこで、再び絵を描き始めました。描

敦賀に移り住み嶺南を描く

きたい時は夜中でも描く。描かないとなれば1週間でも描かない。祭りや文化を描き始めたのは、中日新聞さんから連載の依頼を受けたのがきっかけです。

最初に描いたのは、地元杵見の龍谷寺の山門の再建が題材でした。私が住むのは杵見でも昔からの人が多い地区ですが、地区の会合に出て興味をひいた話を、懇親会のときに「さっきの話、どんなものですか」「どこにあるんですか」としつつこく尋ねたのが取材の始めです。

その後も、こんな調子でひたすら聞きに回りましたが、話をしてくれる人を探すのも結構大変。でも、「ついてるな」ということも、たくさんありました。

ある御寺で絵を描いていて、「あれは何年くらいの本かな」と、つぶやいていたら、後ろで畑をしていたおじさんが「うん、四百年だ」「何で知ってますんや」「わしや、住職や。ま、上がれ」と。

何だか楽しくなってきましたね。

そう。人に会いに行つて話を聞くのが楽しみなってきたんやね。お祭りがあると聞くと、時には2、3日前から訪ねる。そこで地元の人に段取りを前もって聞いておく。で当日、朝一番から皆さんと一緒に準備の段階から「そこそこして。それが面白くなってきました」。

一番印象に残るものは？

どこも素敵ですが、敦賀の「芋粥」の話は自慢できると思います。芥川龍之介が小説を描いていますが、藤原利仁が五位の侍を敦賀に連れてきて芋粥を食わせる話。敦賀の御名がその場所と言われ、説明板もありませんが、敦賀が舞台になつていたというのはいれしきですね。

嶺南には家康も秀吉も来たし、紫式部は愛発の山を越えている。歴史上の有名な人が大概この辺歩いてるんですよ。印象に残るといえば、その歴史の面白さやね。歩いてみて嶺南はどんなところだよ。

東大寺のお水取りは、二月堂建立の際の儀式に遅れた若狭の神様が、おわびにお香水を東大寺の若狭井に送ったというのが始まりと伝わりますが、嶺南と都が結びつく話がいくつもあります。

古代は奈良など畿内が中心と言われま

すが、私には若狭や敦賀から都へ送られていく文化のようなものがあつたように思えますね。

この地域の祭りや文化を地域の活性化に生かすには、どうすれば？

例えば敦賀市内のお祭りや文化財を組み合わせた見学ツアーを組んでみる。西福寺に行ったら、近くの穴地蔵古墳を見る。さらに杵見の王の舞も見ると。お祭りに絡めてコースを作つたらいいのでは。

また、敦賀は車を止められるスポットが多いのが特徴です。だったら、マイカーでの見学コースを作るのも一法ですね。嶺南には、まだまだ見てみたいものの、描きたいものがたくさんあります。これからも絵筆をもつて歩き回りますよ。

弥美神社 王の舞 3態 (美浜町)



深山寺経塚

56億年後へのタイムカプセル

■末法思想と経塚

経塚とは、経巻を地中に埋めた塚のことです。敦賀市深山寺にあった深山寺経塚は評価が高く、出土した遺物101点が福井県の文化財（考古資料）に指定されています。

経塚の造営は平安時代末期の12世紀を中心に盛んになりました。この背景には、末法思想の広まりがありました。

末法思想とは、釈迦の入滅後2千年を経て、その後1万年は、釈迦の教えが及ばない末法の世となり、仏法が正しく行われなくなるといふものです。

しかし、釈迦入滅後56億7千万年後には弥勒菩薩が現れて、この世を救済するとされ、その遠い未来のために経巻を地中に残すことを主な目的として盛んに経塚が造営されました。経塚は経巻を後世に残すためのいわばタイムカプセルだったのです。

敦賀半島 ふるさと 紀行

に残すためのいわばタイムカプセルだったのです。末法の世に入った年は諸説ありますが、わが国では永承7年（1052）からとされ、藤原道長が寛弘4年（1007）、奈良・吉野の金峰山に埋経を行ったのが最古とされています。

末法思想を広め、経塚造営の普及を進めることは、寺社が自らの勢力伸張を図るという、事業としての側面もありました。経塚の造営者の多くは普通の民衆でしたが、写経した経巻を残すことは寺の造営などより容易で功德になると説かれたのでしょうか。

■県内で最古の経塚

深山寺経塚は、木ノ芽川が平野に出る直前の左岸、標高50m弱の尾根上に築かれた経塚群です。近くには北陸トンネルの敦賀口があります。

造営年代は、12世紀の第2四半期から第3四半期と推測され、県内で年代の分かる経塚群としては最も早い段階のものです。

昭和57年に発掘調査が行われ、10基の経塚が確認されました。

経塚は、穴を掘り、穴の中央に経巻を納めた容器を安置。その周囲と上部に石を積み上げたものです。（図「経塚のしくみ」参照）

通常は紙に写経した経巻を銅製の甕などの容器に入れ、さらに経筒を甕などの容器に入れ、すり鉢で蓋



青白磁（中国製の器）。経巻を納めるときの儀式に用いたものか

をします。ところが深山寺経塚では、あるはずの経巻や経筒が残っていませんでした。経筒には銅製のものもありますが、深山寺では経筒が木製あるいは竹製で、経巻も紙だったので朽ちてしまったのではと推定されています。

■経巻を守護する鏡や刃物

穴に埋めた甕の周囲には、次のようなものがありました。

銅鏡、銅鈴、銅銭、刀子（ナイフ）、刀剣、和ばさみ（握りばさみ）、火打鎌（火打金）。さらに青白磁の合子（蓋付きの小さい容器）、青白磁の皿、白磁の皿など。鏡や刃物は魔よけの意味でした。また、写経に用いた道具類や、経塚造営の儀式の際の仏具も納めたようです。

銅鏡は1号経塚から11面、3号経塚から14面と、ひとつの経塚としては異例の数が出土しました。また、植物や鳥や蝶の文様を描いた日本製の鏡（和鏡）のほか、中国の湖州で作られた鏡（湖州鏡）など変化に富んでいます。こうした手の込んだ経塚を造営するには相応の財力が必要で、その富は敦賀の港での対外貿易によって生まれたとみられています。

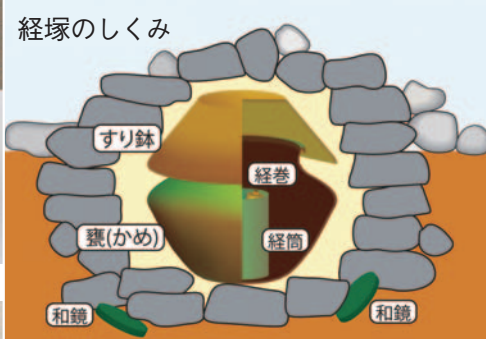


湖州鏡（中国製の銅鏡）。背面に生産者の名前が鋳出されている（四角い枠内）

鏡は穴の中に、光が反射する面を外に向けて置かれていました。これには光を跳ね返す魔よけの意味があります。深山寺経塚は造営当時のままの姿で出土したため、経塚について多くのことが判明しました。

■氣比社との関わり

深山寺のほか市内では、経塚として大蔵の大棕神社経塚や金ヶ崎経塚、谷口経塚、舞崎経塚が知られています。これらの立地を見ると、いずれも氣比社の関与する聖地であり、しかも金ヶ崎を除いて氣比社から東方の聖地です。そこから、経塚造営には氣比社が関与した可能性が想定されています。（写真の出土品は敦賀市教育委員会蔵）



大棕神社2号経塚から出土した蓋付きの銅製の経筒。鋳物を薄く削って作ったと見られている



和ばさみ



刀子（ナイフ）



すり鉢（深山寺6号経塚）



カメ（深山寺2号経塚）



刀子（ナイフ）

大棕神社2号経塚の出土状況。中央の割れた甕の中の黒っぽい円筒が経筒

大道博行所長に聞く

原子力機構敦賀本部の「レーザー共同研究所」は、レーザーの原子力への応用と、開発した技術の産業界への利用促進に努めてきました。現在は、東京電力福島第一原子力発電所の処理への対応技術の開発も始まっています。大道博行所長に話を聞きました。

人工的に発生させるレーザー

そもそも、レーザーとはどういうものなのか。

レーザーとは人工的に規則性の高い「光」を発生させることですが、まず光についてお話ししましょう。

光は、ラジオや携帯電話の電波などと同じ、電磁波と呼ばれる「波」の一種です。波の一つの山から次の山まで（あるいは谷から次の谷まで）の長さを「波長」と呼びますが、光にも波長の違いにより様々な種類があります。おおまかに波長が長いものから順に赤外線、可視光線、紫外線、X線などに分類されています。そして、それぞれの波長領域ごとに光の特徴が異なります。

例えば可視光線である太陽光は人体を透過しませんが、波長が短いX線は人体を透過します。このX線の特徴を利用しているのがレントゲン写真です。波長ごとに異なる光の特徴を知り、

その特性をうまく生かすことが研究の第一歩となります。

また、光はエネルギーを持っ

ていて、人間は光エネルギーを様々な方法で利用しています。一点に集められて高い強度となった光は様々な物質と相互作用を引き起こしますが、これらを解明することによって、新たな分野への光の応用の道筋が開かれているのです。



エネルギー密度の高いレーザー

なるほど。それではレーザーについて詳しく。

レーザーとは、人工的に作られた原子や分子の興奮状態から規則性の高い光を発生させる（誘導放出）ことです。太陽光や照明などから出る光は様々な波長が混在するとともに、波の山や

谷の位置、進行方向などもバラバラなため、エネルギー密度に限界があります。これらを揃えることにより、極めて高いエネルギー密度を得ることができます。これがレーザー光です。

レーザー発振器は種になる光から一定の波長だけを選別し、方向を揃えるなどして、波の山と谷の位置がぴったり揃ったレーザー光を放ちます。

レーザー技術は1960年の発明と歴史が浅く、21世紀の技術と期待されています。

原子力の現場に適したレーザー

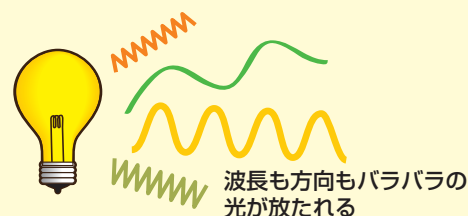
そのレーザーを、なぜ原子力機構が研究しているのですか。

原子力発電所には被ばく低減などの観点から、作業をできるだけ遠隔操作で行いたい場所もありますが、レーザーは遠隔での切断や破碎、測定といったことには適しています。近年、レーザー機器の小型化が進み、レーザー技術は原子力技術の高度化に大きく貢献できる資質を有しています。

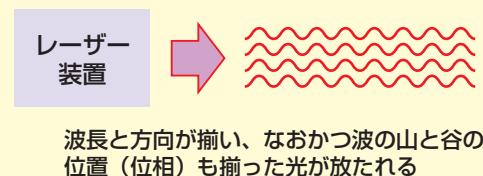
こうしたなか、レーザー共同研究所は原子力機構の関西光学研究所（京都府及び兵庫県）の研究成果を受け、平成21年9月に敦賀本部に開所されました。

本研究所ではレーザーの研究をし

◆照明や太陽光などの光のイメージ



◆レーザー光のイメージ



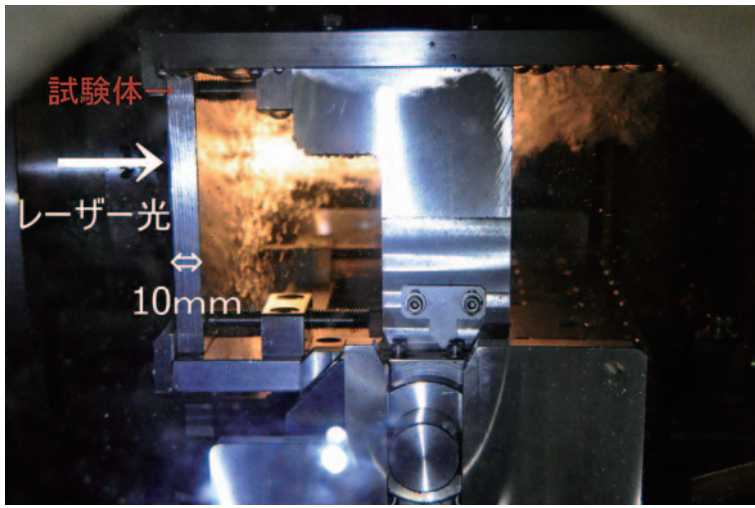
ているのではなく、レーザーの優れた性質を原子力の様々な分野に利用させてゆく、そうしたレーザー利用研究を行っています。具体的には「もんじゅ」をはじめ原子力施設へのレーザー応用技術を開発することですが、それを通じて得られた技術を地域の産業の利用に供してゆくことも目標としています。

医療現場にも技術成果を適用

産業界への展開も目標の一つだということですね。

医療の現場でのレーザー利用を例としてお話ししましょう。

本研究所は開設当初から、「複合型光ファイバー技術」を基軸にした医療機器の開発を、福井大学医学部、福井県立病院等と共同して推進してきました。レーザーは、「観て直す技術」に適しています。この観点から、照明用や



レーザー水中切断試験装置（表紙の写真参照）での実験の様子

画像撮影用、そしてレーザー照射用といった機能の光ファイバーを束にした「複合型光ファイバー」を用いることにより、細管内の様子を観ながら直す（溶接する）技術が開発されています。医療の現場でもこの技術を応用することにより、患部を観ながら治す（切る・つなぐ）ための装置の開発が進められています。ファイバーの束全体でも直径1〜2mmなので非常に狭いところにも入れていきます。

具体的な例としては、脳動脈瘤の治療に複合型光ファイバーを使用し、これによって血管を一時的に遮断することなく、さらに治療部位の様子を観な

原子力や産業界の現場に役立つ

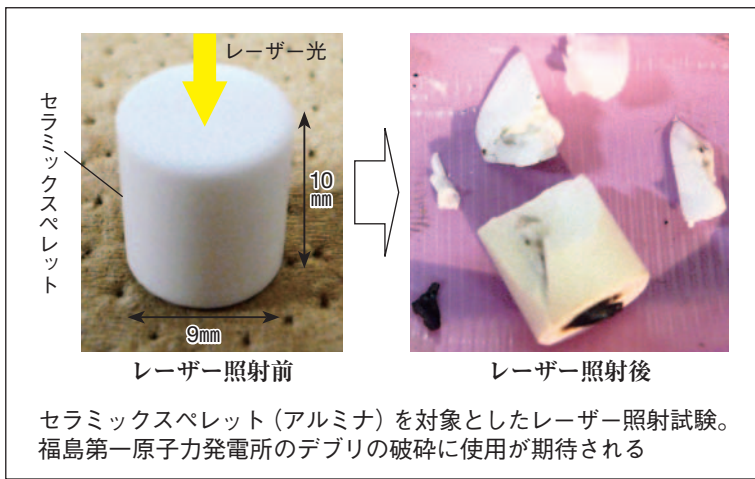
レーザー技術の開発を目指し

からバイパス血管を接続する技術の開発を福井大学医学部と共同で行っています。

廃炉の現場で使える切断技術

「ふげん」では廃炉技術の研究を行っています。これへの利用は？

「ふげん」、若狭湾エネルギー研究センターや民間企業と共同で、廃止措置



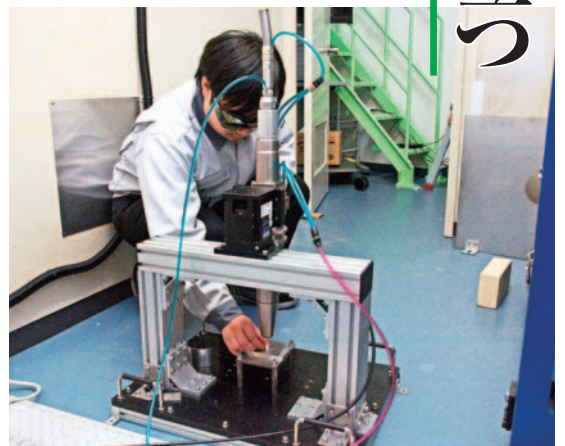
に役立てるため高出力ファイバーレーザーを利用した切断技術の研究開発を進めています。

原子炉の構造物には、これまでの運転で放射化されているものがあります。そこで切断時に発生する粉じんなどによる放射線被ばくを低減する対策が必要です。このため「ふげん」では、原子炉の周囲にプールを設置し、水中でレーザー切断を行う工法の検討を行っています。今は、その一環で150mmのステンレス製鋼材及び炭素鋼材の切断実証に向けて試験を継続しているところです。

福島第一原子力発電所のデブリ処理にレーザーを

こうした技術は、福島第一原子力発電所の処理にも応用できそうです。 「ふげん」の解体のための技術成果は、福島で将来必要とされる処理にも適用できると考えています。

福島第一原子力発電所で大きな問題となっているのは、デブリと呼ぶ高温で溶けた燃料などが原子炉の底に堆積した物の撤去です。ところが、これは非常に硬い金属酸化物（セラミックス）なので、機械では切断が困難なのです。



レーザー共同研究所で研究する職員

そこで私は遠隔操作により材料にレーザー光を瞬間的に当てる方法を研究しています。こうすると、レーザー光の当たった部分は瞬間的に加熱され、内部に熱応力と呼ぶ大きな力が生じます。そして、この熱応力によって自分自身で割れてしまう。この方法が硬いデブリの破砕に使えないかと考えています。

さらに、照射レベルを小さくして、できるだけ核物質が散乱しないように、「小さく当てながら、大きく破壊していく」ことも可能ではないかと考えます。レーザー利用の可能性は限りがないようですね。

そう思います。原子力に端を発した研究開発の成果が、作業の現場や地域の要請に依って一般産業分野のレーザー利用技術の高度化に反映されるよう取り組んでいきます。

もんじゅで総合防災訓練

事前に「想定」を知らせず実施 今回初

高速増殖原型炉「もんじゅ」では、平成24年12月19日に総合防災訓練を行いました。

本訓練では想定事象を事前に参加者に示さず、訓練が進む中で、その時点での想定を順次発表。こうした状況の変化に臨機応変に対応する方式を初めて採用しました。

参加者は、①大規模地震発生による原子炉自動停止②停電による外部電源の喪失③荒天による全ディーゼ



「もんじゅ」現地対策本部

ル発電機の機能喪失④弁の破損により放射性物質が漏えいして敷地内線量率が上昇…と次々に示される訓練シナリオにも的確に対応できることを確認しました。

原子力機構では、今後も訓練を継続するとともに、あらゆる事象に対応できるよう必要な改善を図っていきます。

文科省もんじゅ研究計画作業部会

「中間的な論点」をとりまとめ

新研究計画は「夏ごろまでに策定へ」

平成24年12月11日、文部科学省のもんじゅ研究計画作業部会は、今後の研究計画策定にあたっての中間的な論点を取りまとめ、その中で、「もんじゅ」で行うべき主要な研究開発として次のような項目を示しました。

(第5回作業部会資料より抜粋)

(1) 高速増殖炉の成果のとりまとめを
目指した研究開発

「高速増殖炉開発の成果のとりまとめ」のために行った「高速増殖炉開発における技術の重要度」と「もんじゅを利用することの優先度」の

ふげんでも真剣に訓練

原子炉廃止措置研究開発センター（ふげん）も、2月13日に総合防災訓練を実施しました。

「ふげん」は現在、廃止措置の第一段階である使用済燃料の搬出期間にあり、既に全ての燃料が炉心から取り出され、使用済燃料貯蔵プール内に保管されています。この段階で原子力緊急事態の可能性が考えられるのは、プール内の使用済燃料に係る事象ということになります。このため訓練では、貯蔵プールでの冷却水配管からの漏えいと地震・津波の

襲来が重なったことによる、全交流電源の喪失ならびに敷地境界での放射線量上昇を想定しました。

当日は①対策本部の速やかな設置と衛星通信等による関係機関への通報連絡②モニタリングカーによる緊急時環境モニタリング③災害対策活動に従事しない要員の避難④全交流電源喪失時の対応（プールの水位・温度監視やプールへの冷却水の補給機能の確保）等について参加者が役割に沿った対応を行い、緊急時の対応手順や資材・機器に問題がないことを確認しました。

全炉心照射試験を性能試験と同時に開始する。

(3) 高速増殖炉の安全性強化を目指した研究開発

「もんじゅ」におけるシビアアクシデント検討を踏まえ、評価技術の構築を図る。アクシデントマネジメントの整備と訓練に基づく改良を図っていくとともに、自然循環試験計画を検討する。

*

同作業部会では、今後、詳細な計画の策定に向け、さらなる検討を行っていくこととしています。なお、新しい研究計画は今年夏ごろまでに策定される予定です。

原子力機構は、「もんじゅ」の研究計画の達成に向けて、安全を第一に、透明性をもって、研究を進めてまいります。

気象と放射線量を同時に測って伝送

山田技研(株)^(福井市) 装置開発、本格運用開始

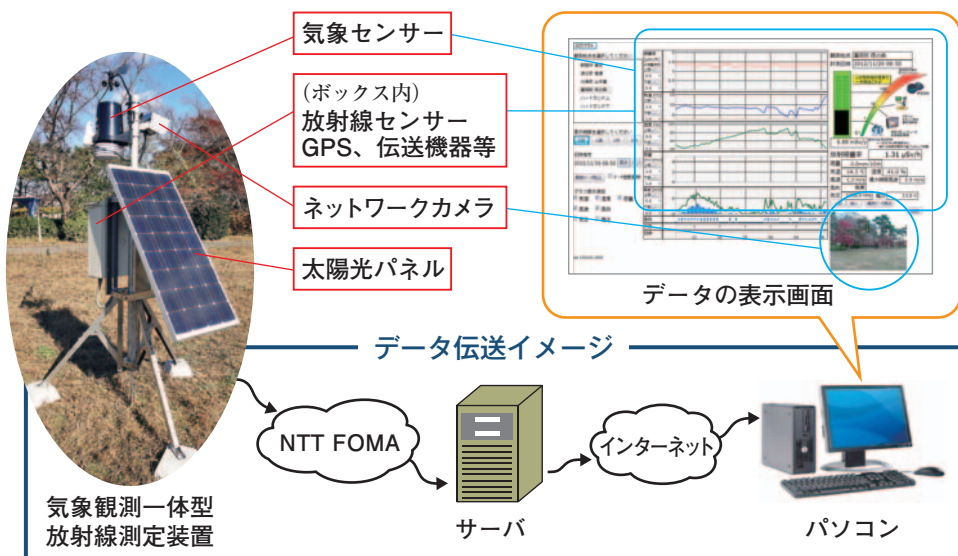
原子力機構の特許活用し

成果展開事業

日本原子力研究開発機構は、機構が持つ特許等の技術を企業に活用していただき、新製品の開発を支援する「成果展開事業」を行っています。平成23年度からは、新たに「震災対応」のテーマを創設しました。このテーマで開発・製品化された装置は、既に福島県内の除染特別区域の主要な場所でも本格的な運用が開始されています。

期経時変化を任意の場所において監視できるものです。計測したデータは、FOMA携帯通信網を利用して、Webサーバへ送信、閲覧が可能なシステムとなっています。これまで、同一地点で気象計測

福井市の山田技研(株)は、平成23年度～24年度の成果展開事業で、自社の持つ気象観測に用いるデータ計測技術と原子力機構の特許「家庭用放射線メータ」を活用することで、「気象観測一体型の放射線センサー」の開発を行いました。気象観測と放射線による空間線量率*を同時に計測できる本装置は、気象センサーと放射線センサー、ネットワークカメラ、太陽光パネル、GPS、データ伝送機器などを一体化し、三脚方式を用いたコンパクトな装置であり、気象計測データ及び空間線量率の長



データと空間線量率の両方を継続的に計測する装置がなかったことから、本装置の活用により、空間線量率と気象条件の関係が解明できることが期待されます。

福島県下の除染特別区域に設置

現在、試作機の福島県南相馬市内への設置に続き、製品化された装置を福島県内の除染特別区域（飯舘村、浪江町、川俣町、富岡町）にそれぞれ設置し、本格運用、データ計測を実施しています。これらは、今後本格化する除染モデル実証事業のフォローモニタリングに活用されることも期待されています。

*空間線量率 対象とする空間の単位時間当たりの放射線量

原子力機構では、成果展開事業のほか次のような様々な事業を行っています

「もんじゅ」における電気・計測制御設備の保守管理の不備について

高速増殖原型炉もんじゅにおいて、平成24年9月にナトリウム漏えい検出器点検計画の変更手続きの不備が確認されたことを受け、他の設備について同様な不備がないか調査を行った結果、電気・計測制御設備についても点検時期の延長や点検間隔・頻度の変更の手続きに多数の不備があったことが確認され、このことについて同年11月に公表いたしました。

います。

・原子力機構が抱える研究課題または地域企業から受けた技術相談について、その課題解決に結びつけることを目的にあらかじめ実用化への成立性を見極める「技術課題解決促進事業」

・機構のビジネスコーディネーターがそれぞれの専門知識や技術知見に基づき、地域企業からの技術的な相談に個別に対応し、企業の課題解決を支援する「技術相談」

・機構と地域企業がお互いの技術や研究開発施設等を紹介し合い、相互の技術向上やニーズとシーズの融合による新製品開発、新産業の発掘につなげる「技術交流」

お問い合わせ先 敦賀本部経営企画部技術展開推進グループ 電 0770-2313021(代表)

した。

その後、本件の根本原因や再発防止対策について外部の専門家からのご意見、ご助言をいただきながら究明、検討を行い、その結果を本年1月31日に国の原子力規制委員会に報告しました。

原子力機構は今般の保守管理上の不備の発生を経営上の最重要課題の一つとして重く受け止め、組織を挙げ再発防止に取り組むとともに、再発防止対策の有効性についての評価と見直しを適宜行うことにより継続的な改善に取り組んでまいります。

楽しみ様々アマチュア無線

JARL敦賀クラブ

「JARL敦賀クラブ」は、「日本アマチュア無線連盟」(JARL)の登録クラブです。会員は男女25人。年齢も幅広く、職業もさまざまです。

音声で、モールスで:

アマチュア無線を楽しむには、アマチュア無線技士の国家資格が必要で、そのうえで無線局の免許を取得すると、呼出符号(コールサイン)が割り当てられ、電波を送れます。アマチュア無線ではマイクを通して

音声で会話するのがベースで、いろいろなことを話しあっています。

一方、キーを使うモールス信号も根強い人気です。海外通信では欧文の符号を使いますが、略語(例 GM「グッドモーニング」)を連ねて簡単なやりとりができるので、英語に堪能でなくても大丈夫とのこと。

無線での大きな楽しみの一つがQSLカード(交信証明書)の交換です。互いに交信したことを証明しあうカードで、カードに松原海岸や水島を描けば敦賀のPRにもなります。

災害時に無線を役立てたい

敦賀クラブは毎週月曜夜、会員が一定の周波数に合わせて、近況報告などをしあっています(オンエアミーティング)。車に無線機を積んで、近くの電波状況の良い山の上に出かけ送信することもあります。

クラブは敦賀市の災害ボランティアの登録団体にもなっていて、防災訓練にも参加しています。最近では、敦賀の訓練会場と小浜市内の山頂との間で無線交信。「小浜と敦賀間の道路が崖崩れで通れなくなっている」という情報を小浜から訓練会場に送り、受信した敦賀クラブが訓練本部に伝えるという想定で実施しました。

震災で携帯電話などが使えなくなっ

ても、被災地にアマチュア無線家がいれば、使える無線設備があれば通信は可能。小さい無線機なら、車のバッテリーで結構長時間稼働できるそうです。

自作の無線機から電波が海外に

アマチュア無線家は情報交換だけが目的ではなく、自分の技術で組み合わせ作り上げた無線設備を介して、電波が日本の隅々、海外にまで飛んでいく。そこにロマンを感じると言います。

会長の山崎佳之さんは、「海外相手だと電波の状況が大変悪いこともあり。そんななか蚊の泣くよりも小さいモールス信号の音をノイズの海の中から聞き分ける。そして相手に向けて発信して、最終的にはコールサインも確認しあえる。そういうプロセスが苦しいけれど達成感と言うか、山登りに似た楽しさ」と話してくれました。

無線はリフレッシュの趣味

アマチュア無線家には仲間と話すだけで楽しいという人もいますし、海外通信に熱中する人、QSLカードを集めて賞を狙う人もいます。楽しみが多岐にわたっているのが特徴だと言えます。そして山崎さんは「ひと時、日常のことはちよつと忘れて、コーヒーでも飲みながら無線を楽しむ。リフレッシュの趣味なのかな」とも。

JARL敦賀クラブ・コールサイン JJA9YBJ

趣味とサークル

その後、愛発村は66年後の昭和30年、敦賀郡の5か村とともに敦賀市に編入されました。旧愛発村役場の庁舎は今も残っていますが、役場の門柱は長く保存され、今は愛発公民館下に移設されて、愛発村のあった時代をしのばせています。

説明板には愛発地区区長会の名で、「愛発地区の発展を祈念し、郷土の歴史を後世に語り継ぐ為」、門柱を設置保存すると記しています。

像と碑
ぞうといしづみ

旧愛発村役場の門柱



古代、都の防備のために畿内周辺に重要な三つの関が設けられました。東海道の鈴鹿関(伊勢国)、東山道の不破関(美濃国)と北陸道の愛発関がそれで、敦賀の愛発の地名には古い歴史があります。

近代になって明治22年、町村制の施行に際し、市橋村、正田村、追分村、駄口村、山中村、奥野村、曾々木村、麻生口村、奥麻生村、新道村、刀根村、杉箸村の12か村を合併して愛発村が誕生。正田に村役場が置かれました。